

『ペルー ラ・モリーナ国立農業大学 世界展開力強化事業留学帰国報告』
国際食料情報学部 国際農業開発学科 4年 西岡 桂

私は昨年(2019年)の8月から一年間、南米のペルーへ留学していました。留学を志望した理由は、同じく昨年(2019年)の2月に短期で2週間行った際にこの国のことをもっと知りたいと思ったからです。野菜も果物も今までに知らなかったものがたくさんありました。また、最近話題の「スーパーフード」の多くがペルーから輸出されており、有用植物を利用した商売が活発になってきました。私の中で何かペルーに対する可能性を感じ、大学生活の一年間をこの国に捧げたいと思い留学を決意しました。

大学では、初めて自分の畑を持ち野菜を育て、ペルーの果物や民族について学ぶことはできました。私は単位や授業にあまり執着はなく、こちらの学生生活を楽しみながら現地を知れば良いという気持ちでした。しかし意外とこの大学で勉強以外に大事なことを学びました。一つは、必要なことは自分から動いてかつしつこく言わないといけないことです。日本での当たり前は通用しない、予想外をいかに乗り越えるかが重要でした。一方で重要ではないことに関してはラテンの気ままなノリを覚えました。書いたらきりがないことがたくさん起こりましたが、今はあんなことで動揺していたのかと振り返られます。苦勞の根源にはスペイン語がつきものでしたが、現地で始めたスペイン語が大学レベルを大体はわかるようになったのは少し安心しました。周りからは褒められるけど、自分の中では途中から伸び悩んでいたのです。形に見える成果に少しは上達したのかなと思えました。

一番の葛藤はさみしさでした。ご飯を食べる相手がいないさみしさや家に帰っても一人なのが嫌で研究室にこもったりしていました。研究室の職員は優しかったです。みんな私のスペイン語の練習に付き合ってくれました。留学生仲間も最初はいなかったのが毎日どう過ごそうか悩みました。そこから農工大から二人と北見工業大から一人院生がやってきて、彼らは毎日実験で忙しそうでしたが時間が合うときは一緒に夕飯を食べたり出かけたりして心の救いになりました。彼らといた5ヶ月間はお互い助け合ってお世話になりました。日本に置き換えて考えてみたら、寮もなく、留学生の交流がなく、クラス制でもなく、一年間だけ滞在であればずっと面倒を見てくれる人などいないのは当たり前だと感じました。私も親元を離れて暮らすのは初めてだったので、いろいろうまくいかず辛い思いをすることもありましたが、これも留学のおかげで少し強くなれたと思うので良かったです。

そんな辛い時期でも楽しみが一つだけありました。それはバスケットボールの授業です。実はそれが唯一単位を取得できた科目でした！そこでは多くの友人に恵まれました。全校大会は来て一ヶ月もしないまま飛び入り参加をし、みんなに

名前を覚えてもらうことができました。その後の学部内対抗でも全て優勝できました。大学の選抜チームでも大学内外で友達ができ、今でも連絡を取り合う仲間がいます。

バスケットと同じくらい好きだったのは旅行です。元々海外旅行が好きで、ペルーの中でも積極的に行きました。初めての旅行は砂漠のオアシスであるワカチナとバジェスタ島へ行きました。ワカチナではサンドボードや高い場所が苦手だけど頑張って登った砂山で美しい夕日を眺めました。夜は気温も下がり砂風が痛かったのですが、ワカチナの夜景は本当に美しかったです。ペルーの好きなところは海岸、山岳、熱帯地帯の三種類を同じ国で体験できることです。山岳地帯はのどかな緑を想像していましたが、何千メートルという想像をはるかに超えた山々でした。高山病になった時は一秒が過ぎるのも辛いです。5500メートルが私の最高記録で、今後これを超えていこうとも思いません。ただその時の景色は一生忘れられません。三つの区分のうち最も好きなのがジャングルです。汗をかいて美しい虫や動物を探すのが楽しかったです。中でも両手くらいの大きさの青い蝶は私の憧れです。いつか自分で標本を作りたいです。謎のアリが上から大量に降ってきて噛まれて激痛だったのも今ではいい思い出です。未だに傷は消えていません。あとは蚊に刺されると風船みたいに腫れてしまい毎回そこだけは避けられませんでした。夜の星がとても綺麗なのですが、ペルー人はあまり空に関心がないのかこれが当たり前なのか、一緒に感動してくれる人はいませんでした。旅の終わりにはリマに戻って安心したいと思えるほど環境には慣れました。

家も一度引越し、自分で新しい場所を見つけました。ボロボロのミニバスで移動もできます。タクシーの値切りもできるようになりました。本当に生活していくための最低限のことですが、怖くて出歩けなかった日々と比べると成長したなと思います。ペルーは怖いイメージがあったのですが、暮らしてみるととても豊かな国でした。一部の人柄は短気で横着でしたが、外国人の私にとっても良くしてくれる人がほとんどでした。そして彼らは私を強くしてくれました。殻にこもっていたらこの国ではなにも通用しない、言いたいことがあるならはっきり言え。貧しくても楽しそうに生きる人びとや何年かかっても大学を卒業したいという思い。むしろ自分はこの年齢でもう大学を卒業できることがすごく恵まれているのだと知りました。人生まだ長い、好きなことを自分のペースでできる幸せを感じました。私も日本の社会に恐れず、しっかり自分の気持ちを大事にしていきたいと思いました。

最後に一年間という長かったようで短かった留学は、浮き沈みの激しい毎日でしたが、生涯忘れることのない思い出と人々に出会えました。力になってくれた家族友人、そして先生並びに職員の皆様に感謝申し上げます。残りわずかの学生生活を頑張っていこうと思います。